



譜

蓮

菜

寫

地

中村俊定文庫

文庫 18

516

1





松崎賦



そもくしゆぬさふちと種と松崎を杖乗舟一
 乃好ゆうて丸河底西湖を船を舟を舟を舟を舟
 を入る河の中三里湖に能瀬をくさふ七十二
 字敷百乃字敷歌つものを天を拾ぬとも能
 ち波よ匍匐あふり二さよかさなり三言ふた
 こそたよけれ衣よはなる眉るあり抱る家
 うと児孫是とるがらう一肉あごど外ぬこ
 鳴くぶと雲牛一島帳一海内裏一ま



何處色うきとあるは小舟漕り
者より受くよはれてなりもとふくむ
舟を舳し末の松ら寺となりて松の心ゆく
墓を築く羽をうり枝をたぐぬる勢は末
を終る皆かくのこしと忠し野田乃玉川
沖のふふ城のそ新武隅の松粒此境よ
急をたぐりてなりぬれ浦をたぐりぬる
明井あり神事のかた灯籠文治ら及泉
の二節奇進と記を雄語り破り地つきと

雲居禪師乃別室のあふ坐禪石陽岩
寺々相掇ち時頼入道の建之由時と十二世の
むしき登平四節とありて入るる朝の境
築ふそを後作は政宗再興して七堂伽藍
となりたり法蓮とて海老は時老杖執
をいさし花繖はふりて松の緑の中やふ枝
葉波風よ吹るらんく屈曲をのりてた先
と新ふらちや振舞ひにひく大庭戸

すも乃ちなるをこころよや造化の天工のまじり
人う筆をみよひ詞紙をよむ

堅田十六巻紙

る月の影真なるを屋中ぞ今宵ち二子子よ
つとむく神くぬをかゝ田の浦よるに甚日そ
たさうれ乃ちどなるらんふく成秀とつ人の
家の垣の漕入きて酔翁相客乃月ようれく
来きるあそと舟の中うりあふふとよあ
るべしおのこをおくつまよはるひく簾をまら

らるをけふよ其の後園は茅ありけりもあ
るく鯉魚乃切目をさぬうもあつたやうく
岸上は楓をたうく道との魚くをれくさる
の音を流を月をさゆりもあふくはる
湖上もふやふ照りしれそ帯てさく仲秋を
流しを月の流えきよはるむうをを鏡らるふ
なるう今宵あをちのあさ遠くしきか能
堂との標子にうれいと水蒸らた右ふりれ
てそるよ十二峰の影をらるかとかくつあを

月も二半ありて雲霞はうらよかたれをんら
神々鏡ふとつらふをさくをらしきとありし眞を
そくくありく空のかくくをと客をりてなを
んさくく切あり居くそそ月のをとを
ちと水西よ玉塔の影をくくよてあつたふ千
那佛一乃光をさふ輝やそそいのみくをせ乃
中ふくけてかかぬく月のおくおのころあ
京極貫つ乃歎息の詞なるを我をふふいし
げ堂よあそいし二きい惠ん僧部はを

うららきと常親相法使なるをやといふあ
トら真よ宗して来る客をたはらと真
はふくくぬさむやともの岸上よ石をめぐ
神の月を横川よかきふきて姑換城乃
鐘もアゆらく

やましくとあくくさふ月乃雲
鎖あきそ月はくくは浮見堂

月見賦

こくく琵琶湖の月をむとてあくく木曾

寺よきし病して膳所松本の人とて信を
に乙刑を酒をきくして糸川よりのあま
はくし西秀の宗匠はくし信楽よ一おろ夏
をけ中よ今春の茶をい酒をいあまの
も二流よさうれく酒をさ灯よかぬよと茶
よ玉川の歌を詠ふお妙を有さぬよふく
を酒よ樂天の詩を吟よと支考のさくも節を
老ぬぬ智月をおろお月はあふあつきのあ
中のうまよほいさうとせれの中よも惟妙法師は

酒よおとらき茶よ感ふあまもくも酒もく
よれゆく雲子よ三子者の志をさうとさうんや
中してを介乃女とさうんも歳と洋くのいし
と志れまいての飲中八仙のあまのうん球
やほんくち法師たよんをほくろりぬなとく
ひらかく月見の他あまやとさうんも酒の
をう浮世の介乃女をほくろり

来くぬいなをさうん月の暮

かくしと石の鳥よさうんて湖の月子船

浮くんと物とのむ人の風情をそとてつた拵に
亂平一の唐子ちやそれとも扇の柔羅紗の
男あつた赤壁の船のそとへとあつたそとら
ははちや折々の演のそとへとあつた鏡のそとら
ふはしむらひ日枝の松川乃松よほつたつて比
るのそとらつてつてつてつてつてつてつてつて
羽のそとらつてつてつてつてつてつてつてつて
そとらつてつてつてつてつてつてつてつてつて
とつてつてつてつてつてつてつてつてつて

名月や湖水十流の七小町

はまの家の影の紫式アも石の上源氏の拵
うもを写し唐國の藤居士と西御の越女
はらそほひをそとてつてつてつてつてつてつて
て今のちやらつてつてつてつてつてつてつて
名蹴をうらつてつてつてつてつてつてつてつて
茶店の標十流をそとてつてつてつてつてつて
のそとをそとてつてつてつてつてつてつてつて
うそちよ井の林乃ほちつてつてつてつてつて

鐘をこらひるやや
秋の幸崎の松も
のちもゆるし
と子那尚白を
五更うらぬ

三井寺柴門をうらむやの月

珠よ推鼓のむら
おろそけな
賈鳩う詩賦を

その地をけ人を
こしをおも
ふとふ月と
柴門辭

去年秋うら
しら深切
ひとむ草
繪を好む

李繪之何能為好正や此能の好ぬむらん
其能雅之何の好むとや画の好むと
とつりて用をさるるより用をさるる一也
季やうとや君子の多能を和らむる品こそ
して用一なる其感とて或るや画とつて予
が師とて風雅とて一と予が弟子とたふさ
れども師の画ハ精神徹入至筆端妙をぬり
ふそ遠なるや予うとて其よあつて予う此
雅之其能好む能のどく一能よさうして用

あつて一も新らぬりのこゝろのこゝろ神ふ
つらつとて神一あつたたり神一もあつ
神なるや又おほ一はる神と其の妙をい
そのうも神とて新上實あつて志うもや
トふをさるるとのまひはるるもやこれをい
つとて其力をや一もさる一もさるる
う一なるも神の古人の法をりて其法
古人乃りて其をいふと其をいふと其
大師の筆の道よもさるるも風雅も又これ

二月一とらひく町をうききて紫門の外に
おくらそそ海のめと

元禄六孟夏末

懐抄子辞

駿河の國より川めちうよとつとらうちう
抄子あられきふ位あさうや川の早瀬に
かきて海せ乃波を志のやうとくまあけうら
命や川らと空よきとて重くむ小秋う本の
秋ゆもとそ青やらうんあさやちをまんと

続らう吟物おたうとてあつと

猿を笑人抄子よ秋の風ゆりよ

ゆりふそや汝と又よあくちれらう汝と母
よ跡をらう又と汝をうくむよあうそ母を
海をうとむすうん唯これ天うそ海う性
のほさあささをあけよ

後芭蕉辭

狗中一物をうきをきく一吾能吾智を至とん
其位まう店又とのびたう何う吾流の鉄杆

嘗 鳩乃 翅子 たり 正一と せよ 公中 一書 たり 過
 此 又 吹き たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 破 走 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 三 中 二 の 秋 を 忠一 とい 其 葉 他 日 乃 洞 を たり
 既 極 たり 松 丸 根 たり 情 を 削 たり 住 居 を 曾 たり
 欲 水 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 多 小 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 月 残 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 多 たり たり たり 雲 を たり たり たり たり たり たり たり たり

つ たり たり 来 たり 飄 たり たり たり たり たり たり たり たり
 を 桂 樹 を たり たり たり たり 芭 蕉 五 り たり たり たり たり
 系 七 天 然 九 翠 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 たり たり たり たり 風 たり 鳳 尾 を たり たり たり たり 雨 たり たり
 龍 の 耳 を たり たり たり たり 新 葉 日 たり 撰 渠 言 たり
 たり たり たり 上 年 たり 上 人 たり 子 を 侍 たり たり たり たり たり
 其 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 小 破 たり 安 たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり

芭蕉葉を移す 念子庵の月

栖去辨

おくりしころう終あもきて橋所よりふり
みこころうして陸月起さるるまふ形さぬ
推さうや足もたふし口をさるむくさき
はゆ培胸中をさきひておんちめくや風雅
の魔ふさるるなげ放下して栖を去獲し
さく百錢をたくして拄杖一錡子命を結ぬ
かう得さるる風培強ふ荒をうぬんは
手崔うり上りまふさるる小峰の如

姨捨月辨

あゝいさささるるあゝいさささるる
てさるる姨捨あり月をさるる志をさるる
終る八月十一日のあをさるる道さるる日
さく形けさるる夜さるる暮さるる草捨さるる
さるるさるるのあはさるる那の里さるる
八幡さるるさるる一里さるる南さるる西さるる
さるるあて冷さるる高くさるるあさるるか
岩さるるさるる只さるるあさるるのさるる

かくさきうのしを云きききも理を志し終て
そつ終より始し起す何故あり老し終人を
さうしそんをちゆふいそ後落そひり終て

休き塊はらう那く月方左

閑筆説

色き君子れ惡むとらうして佛も五戒乃
はしめよきうとらうもさうふ控うと起情の
あやうくそ哀形ううしそおけう終るし

人志終ぬくし婦の終梅うと婦しそおと
の卵方白ひよ志して思ふの思の人目中心
そゆし人たうらうさう終あやまらさうは
しむあやめの子老涙の控し終る終る
さうしそんをちゆふいそ後落そひり終て
身れりし未をむさう米錢乃中し魂を
くしめく物の情をわきまうさう終る
はしそ羅ゆしぬるし人生七十を稀る
として身の盛なうらうらう二十餘

かろうそく見の老練来りて一夜の夢乃
こゝろ五十年六十年れはこゝろ好く
わさばいりてしと能く有り寐うちし
志は細きもの別かふ事さうむさうお
ろうたる者さうさうおほし煩悩増長
一藝とくくくくは是非の傍りのわら
これをもて無のくぬふふ富て貪欲乃魔
衆平し心を怒し溝渚よぢりて生く
あゝとくと南華老仙乃唯利害を破布

一老も成りて宗乎たむむ老
の樂は云々人來るは是れ辨を
は他の家業をばくくくくく
を田く社工部一門を鎖むふ友りたを友
く一會を留めくく五十年の頑夫自業
自禁戒とわら

あゝとくや益を鎖おほを門の垣

煤掃説

明ほの空うり物りくくく

夢をさぐりて見るやうく——きふら服をのたふ
燻るゑのこもぬきぬきこらややき井の伝式
九重に所を法と嘉例の記るゆりて唯
たふくの人をまへけく舞うて面白き
おのく——い——とたう奥のむと間を屏風
ようこいなり——大袴よ茶釜をけりて廻る帷
子れと張丸さたりてたふ足袋も——とて
あまの日記のそや——きふらゆき度乃隅
細夜ともうらら——たふ中よ持仏のし

ろむきこふと目あきまは種家の臺乃椽
唯るゆきとこの下を覗きまうらふらや
さむゆきとやとあや——味噌こらと
大胃れ袋うきと甚う——とめつらふ茶櫃
乃さん打はも多廻さけり燈もうきえて
くけりくう繪あこはまのうけと花屋
かこもも能くほとく——とちやく
暮くこらこらこらこら

さくはまやきゆく宿のこ

阿蘇野集序

尾湯蓮た檀木堂主人荷兮子集を編て
名をあれ聖とて何少よけ名ある事
まゝとて予も敢てふとてやふとてせ
振麻とてねとてこれとてあ川めて
の目とて其日とておけとてて
世よかくるをとてやとて文とて
まゝとて柳とて梅とて綿とてあ
のうとてまゝとてたつとて水
信とて信とて御一實と

そととてふとてのもつとて
たつとてふとてのあつとて
ゆとてのちとてつとて
神とてとて景のまゝとて
海とてとてむとて野の原と

元禄二年誕生書

銀河序

小陸乃と新柳とて
海は彼依後とて海の西十八里

て東海三十五里よりかちぬきまきみ祿乃
 嶮難谷の淵くちりさくさくはまらり
 あくやうふくしんはむけしきまきみ祿乃
 あくあやうく世に宿まわれも限らずに目交
 崎くしてゆる大罪朝敵をく遠流を海
 ようくしてまきみ祿乃まきあまな
 うまきみ祿乃あまなまき押定めて暫時の祿乃
 まきみ祿乃あまな日既し海に沈て存かぬ
 うら河まきみ祿乃あまなまきみ祿乃

まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな

あ〜海や住居は橋をふあ〜のり

西行像讚

まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな
 まきみ祿乃あまなまきみ祿乃あまな

卒兜は如小町讚

あふきまきり〜 義もたふ〜 義もさ〜
しれぬ人か〜 けりは〜 けりは〜
め〜 人の威のま〜 けり〜
あ〜 町さ〜 けり〜 義もたふ〜
〜 義もさ〜

きり〜 けり〜 けり〜

石臼讚

市中〜 けり〜 義もたふ〜 義もさ〜

路を〜 けり〜 高山竹林の猛士と
けり〜 けり〜 寛平華一の上皇も終〜
き〜 けり〜 是を見ぬ〜 唯石臼の
けり〜 けり〜 聖一國師を是を〜 國師
けり〜 けり〜 法身志願民家〜 けり〜
けり〜 けり〜 落家〜 けり〜 けり〜
けり〜 けり〜 事〜 けり〜 けり〜
役も優婆塞の店の中〜 けり〜 けり〜
を〜 けり〜 けり〜 けり〜

カキ... 者の... 専ら... 不断...
間... 遊... 居... 事... の
細... あ... や... 黄... の... 統
目... あ... 荷... 老... の... 来
... 音... の... 事... れ...
... 名... ぬ... 監
人... の... の... の... の...
... 月... の... の... の... 独...

お... の... と... 福... の... の...
あ... の... の... の... の...
カ... 其... を... の... の... の...
ふ... の... の... の... の... の...
う... の... の... の... の... の...
さ... の... の... の... の... の...
う... の... の... の... の... の...

煙石銘

人... 短... を... 事... せ... 己... 長... を... 子... 明... 純

物づくは唇寒——種々の風

法筆銘

草の露よひうらむて秋風よひおちうく
竹のさくもたふひ好親のかさあをわうく
うけう竹をうけ竹をきつうてさほくうの種
とふのさくもたふひ好親のかさあをわうく巧
ほくふたれハ物をほくしてさくもあ——紙を
うさぬゆかぬふかして又さくわく法をつか
りて色をさほく——筆のさくもあ——

昨日さくもたふひ好親のかさあをわうく
られ方よまき入ふさほくさくもあ——荷葉か
おちうくもたふひ好親のかさあをわうく
かおのさくもたふひ好親のかさあをわうく
西村は師のうらむてさほくう東坡居士の雪とさ
ふ城野のさくもたふひ好親のかさあをわうく
やうもたふひ好親のかさあをわうく
さくもたふひ好親のかさあをわうく
わうもたふひ好親のかさあをわうく

袂をうねりてさうさう星のうらふさつをゆる
せうさうさうさうに宗紙のやうに

机銘

尚やう時をひらとをささく略馬吹嘘の字を
厚く形ふまはらうさうさう書を細くあう聖
意賢者融精神をほろろ静たう時を平を
とらて歳素の方寸小入きくさうさうさう
一物三用をささく高こ八寸おもて二尺兩脚
よあえつ化をぬさうの卦を彫りて潜龍牝

馬の貞平一習ふ是誠あきて一用とせんや
二用とせんや

東順傳

老人東順ハ横氏うして其祖又江州賢田姓衣士
竹氏と稱を横氏といふものを吾子ら母方ふら
そのかうさうさう七十歳うさうさの秋の存哉
やめ保松乃とふゆりく花さの悟露をさうさ
さうさうさう此座のちさうさう神さう神を
史料の白をうさうさうて大京如典の甚上

多かき〜時醫を学む恒の老して本多何
某の公より俸紗をばく金魚瓢塵乃熱く
や〜はまとも世路を〜〜名士の衣をやり
技を折く業を控既よ下千毎の〜先也市店
城の店より〜樂む事争を〜〜机を〜
ゆ〜とせあちりそ筆跡を〜車〜ふらぬ〜
〜潮上よ〜れく東那手終り城〜
大隈朝市既人なり〜

入月のあ〜〜机を四隅の那

白髮吟

使も又月のまよ〜〜比武清より吉里ふ岸〜
か〜の月日もあちりまや少きれ萱餅もあれ
て〜と〜の付〜た〜〜〜何〜も〜〜
か〜は〜の髪を〜〜眉を〜〜は〜
命あ〜〜の〜〜言〜も〜た〜ふ〜の〜
ち〜を〜と〜ま〜母の白髪お〜よ南窓〜
玉〜は〜は〜眉もや老〜〜年〜の〜
〜か〜〜

一家をかねたまに髪めを巻まらり
中々々々々々々々々々々々々々々々

閑居歳

あゝ物くされぬや日比る人のこゝまゝも
ゆゑ人にもまじりて人にもまじりてあま
いふらふたれと月のおおのあゝのこゝ
まゝのあゝもまゝのあゝや物もまゝのあゝ
てんまゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
えんまゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝ物くされぬや

ほれぬいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

幻住菴記

石山の真岩洞のうゝろふらあり園ふら
そのうゝ園ふら寺のあゝを伴ふらゝゝゝゝ
流を流して翠微よ登る事一三曲二百ありて
八幡宮もやせらふ神侍ハ涼院の尊像とや
唯一の家ふらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
利基の慶を同一うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人の指さうたれハヤク神さひ物志何うなる
傍に位控し草の戸あさうりの根毎新とを
みるよりう登落く執狸うと紙坊うう幻位
菴と云あまの僧何うハ勇士菅沼氏曲翠
子の伯父よなん侍うと今ら八年とうちむう
なうく西小幻位老人の名をのこ紙さうす
市中とさうま一十歳とうちうしてあややを
きざら叢虫乃みの銭先い橋牛れ家を歌きて
眞羽象滔の異名と日よ面をこうくうすんさあ

ゆきくう一上北海乃叢城よきいことを破して今
峯湖水のはふたうい雪の浮粟あうり積く
かうくまの片れ陰の中を新燈淡あう
る光垣の結いさうくして却月のさう光い
うり細よ入いさかやうとあまのいさうい
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
松よかひく時をさうくさうさうさうさうさ
使よあまの紙末つとわ乃はさうさうさうさ
路よ奥うて魂只楚東南よさうさ身ハ津湘洞

庭よ立ふら末申れそらうそらう人あふきほりふ
 陽う南薰風ふらちりー北風海をほりて涼
 日枝のふ比良のう船ふり幸傍のねと雲と見
 て城あそ橋らちりー海あり雲とらちり
 本蕪のふ芝蔴の小田よ早苗とて雲と見ふ夕
 雲紅をよ水鶏のうとく雲系物とてたて
 とふふれー中よととふら土まの付よかふ
 衣花あふふふふふふふふふふふふ田とふ
 よ古人とからふふふふふふふふ襦袢とふ

ふあふ黒はの里とてうううううう細代とふ
 ううううううううううううううううう
 ちううううううううううううううううう
 田たをふく猿の腰掛と名つを彼海棠よ雲を
 ううううううううううううううううう
 あううう唯睡癖ふ民とちうううううう
 出ー雲山よ風を打くうううううううう
 町と谷とほりあを波く自炊くううううのうと
 徒く一炊に備うううううううううう人の

時ふんまぐ住ちり〜竹うてさくら〜おさねおとねも
あ〜お佛一回を湯〜おのおおさむりまふたも
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
加茂の甲斐何〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
いささ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
等紙深て幻住養乃三字を送〜〜〜〜〜〜の信正
紀念とち〜ぬさ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
き〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
松の上れ柱よ急〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正

しを勤〜あ〜〜宮さ〜〜里乃おのこた入ま〜〜の
あ〜の編〜あ〜〜〜〜豆畑よ〜〜〜の信正
ぬ農談日既〜山の塔〜〜〜〜〜〜の信正
穀を付〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正
乃麻〜入〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の信正

て見れば多し情を寄して志しき生涯の計とて
る世ハ終よ無能サあしては一毎よつち家樂天ハ
不勝の神をやう老杜ハ瘦く賢悪又雙の比
かうさうもつらう幻の住家やうにやうさひ控りし
是くのむ推の本もあう左本也

十八樓記

其流乃必ちうう川よ能きそそそあ橋あそあし
を空海氏とよ福紫山後よきく乱ん左右よか
かうてらうか後遠くは田中ハ其寺ハ板乃一也

ふうり種て家よよ民あそ竹のかきものさうも深
曝布よよ引もして右よ渡ハ板は里人びら
まけく漢村射をかして細をいふ約をたきあの
さうくもさうけ様をりてあはし似てうさうさ
甘食の目もさうさう入目の穀も月よかりうさ
むさわうかき大乃穀もやちうくさ探のりふ
精銅とさうさ様よめさ海よそのかろうさ
かの漢お乃ハかむやう是支湖の十孔境も海
一味乃うらふおむいさうさうさうけ樓よ名を

いそむとやうに十八橋ともしり橋を……

はあ……う目ふにやれとれ皆深……

紙倉記

古きゆら……古きゆら……き妃うか……
て急と……哀傷……床の敷乃……
ハ登考をぬいぬ……のほ……
世と……彼と……層……
……
……紙の……

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

伊賀新大佛記

伊賀志國阿波の庄予新大佛と云ふありけり
るやれ都東大寺の印と後宗上人の四跡
たつとふく一舊里小まをこめて旧友宗七宗無
とてうぬくうささい物とて忠地とある二王門撞
樓のあは枯とて草花とてふかく種とて松のい
事とてむる石居とてうすすまのいといひん
もう教とてまふ似とてんや城ふつてまを死
基獅子のたやんとてまといふとまがれあを乃こ

とて御仏の志とてかろ岩窟とてまを種と
霜と朽苔と埋とてくつりふとてまをま御
斗ハつとてほくをぬくとて人の法教とありぬを
とて草堂のいほふ安直とてまを誠とてま
の人乃力をほくぬとて上人の貴願とてまを
ゆとてまをぬとて後宗とてまをぬとてまを
ま石基とてぬとてまをぬとてまをぬとてまを

夫六平一陽とてまをぬとて石の上

